

〔原著〕

千葉県，神奈川県，東京都の小・中学校教師を対象とした 社会的スキル教育のニーズ調査

筑波大学人間総合科学研究科：藤枝 静暁

筑波大学人間総合科学研究科：新井邦二郎

The survey of the needs for social skills education of elementary
and junior high school teachers in Chiba, Kanagawa and Tokyo

Shizuaki Fujieda and Kunijiro Arai

1. 問題と目的

児童生徒の対人関係のあり方が，最近になって多くの研究者の研究テーマとして取り上げられることが多い（佐藤・立元，1999）。特に，児童生徒の社会的スキルに焦点を当てた研究の数は年々増えている。社会的スキルに関する先行研究より，社会的スキルの不足が様々な学校不適応と関連があることや将来における健康被害の発生とも関連があることが報告されている。たとえば，攻撃性や引っ込み思案と社会的スキル（佐藤，1996），怒りやすさと社会的スキル（仲田，1999），対人不安や緊張感と社会的スキル（仲田，1999，菅原，1996），孤独感と社会的スキル（相川，1996a），うつ病と社会的スキル（渡辺，1996）の関連性が指摘されている。また，学校不適応の中でも深刻な問題として認知されている不登校児童生徒数の増加に関しても，その原因のひとつに児童生徒の社会的スキルの不足が挙げられている（小林，2002）。社会的スキルは学習の原理と技法によって体系的に教えることができる（相川，1996b）。だからこそ，小野寺・河村・武蔵・藤村（2004）が指摘しているように，児童期という生涯発達上の早い時期に，個々の課題に合う適切なソーシャル・スキルを身につけさせることが，児童の学校適応および今後の社会適応の予防的・開発的援助となるのである。既に，幼稚園，小学校を

中心として，中学校においても，児童生徒を対象として，不足していると思われる社会的スキルや新たな社会的スキルを意図的に教え，対人関係能力を引き上げようという取り組みが始まっている。

こうした取り組みに対する呼称はいくつかあり，統一されてはいない。教育現場では社会的スキルについて知識がない教師もまだ多いと思われる。今後，社会的スキルを取り入れた教育活動を普及させていく過程では，いくつかある呼称を整理する必要がある。1993年ごろの先行研究に目を向けると，社会的スキル訓練（Social Skills Training，以下 SST とする）と呼ばれていた。例えば，佐藤（1993）は自閉症の幼児2名を対象として，佐藤・佐藤・相川・高山（1993）は攻撃的な幼児2名を対象として，佐藤正二・佐藤容子・高山（1993）は引っ込み思案な幼児3名を対象として，佐藤容子・佐藤正二・高山（1993）は攻撃的な幼児4名を対象として，社会的スキル訓練を実施している。これらの研究の特徴は，対象が数名の幼児であったこと，治療的な目的で実施されていたことである。1997年以降より普及し始め，現在の主流となっているのは，小学校において学級に在籍する児童全員を対象として，社会的スキルを学習させる教育的取り組みである。たとえば，小学校4年生を対象した藤枝・相川（2001），小学校2年生を対象とした後藤・佐藤・高山

(2001), 小学校5年生を対象とした石川(1997)の研究などがある。藤枝・相川(1999)は小学校3年生から6年生を対象とした研究を行っている。これらの先行研究の目的は、特定の障害や不適応に対する治療ではなく、学校不適応に対する一次予防である。藤枝・相川(2001)はこうした試みを学級単位の社会的スキル訓練(Classwide Social Skills Training)と呼び、後藤ら(2001)は集団社会的スキル訓練と呼んでいる。両者の呼称は異なるが、学級単位で実施している点、特別活動や道徳の授業時間枠を利用して実施している点、学級担任がトレーナーを担っている点、複数の社会的スキルを取り上げている点、事前事後で効果測定を行っている点など内容は同一である。したがって、本研究ではCSSTと集団社会的スキル訓練を同義として扱い、CSSTに統一して表記する。これらとは別に、社会的スキル教育という呼称がある。たとえば、國分(1999)は社会的スキル訓練または社会的スキル教育と表現し、小林(1999)は学級でソーシャルスキルを学ぶことをソーシャルスキル教育と呼び、金山・中台・前田(2004)は予防的・発達の観点を重視し、学級全体を対象として実施される社会的スキル訓練は、社会的スキル教育と呼ばれると述べている。本研究ではこれらの概念を次のように整理する。社会的スキル教育(Social Skills Education, 以下、SSEと略する)がマクロな視点から社会的スキルを取り上げることから、上位概念とする。SSEに対する下位概念として、CSSTとSSTを位置づける。SSTとCSSTは実施形態(少数または全員)と目的(治療的または予防的)をもって区別する。

松尾(2002)は、個別の治療的かわりから学校全体に対する予防的・開発的援助へ、スクールカウンセリングが移行していると指摘している。既述の通り、SSEの中でも、学級や学校全体を対象とするCSSTが主流となっている。CSSTの特徴は①授業時間の枠の中で実施できる、②学級担任が訓練者の役割を担うことができる、③児童全員が訓練対象であり、同じ社会的スキルについて学習できるといった点に

ある(藤枝・相川, 2001)。CSSTはこうした特徴ゆえに、学級だけでなく学校全体への適応も可能であり、複数の実施事例が既に報告されている。東京都豊島区立大塚台小学校(1997)は生徒指導の一環として全学級でCSSTを実施し、東京都府中市立小中学校教育研究会学校教育相談部研究会(2000)と東京都立川市立小学校教育研究会教育相談部(2001)は市内全体で学校不適応の一次予防の手段としてCSSTを導入していた。これらの取り組みは、「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる(小林・相川, 1999)」のプログラムに沿って行われた。このプログラムでは、12の社会的スキルを推奨している。12の中から、各学年の教師らが発達段階や子どもの実情に合わせて子どもに学習させる社会的スキル(以下、目標スキルと呼ぶ)を選択し、CSSTを実践した。これらの実践がなされた当時は、類似の研究例がまだ少なく探索的に行われていた部分があった。それゆえに、CSSTを実施すること自体に主眼が置かれ、学校児童の社会的スキルをアセスメントするという視点、実験計画法に則って効果測定を行うといった視点などは含まれていなかった。ゆえに、先駆的研究であり、大規模な取り組みであったものの、結果の成否を客観的に判断する材料に欠けていた。

その後、東京都豊島区立大塚台小学校(1997)などの取り組みで欠けていた要素を補いつつ、学校全体や地域全体でCSSTに取り組み、その効果を実験的に検討した上で、研究成果を報告したものが増えてきている(江村・岡安, 2003; 富山県総合教育センター2002, 2003)。富山県総合教育センター(2002, 2003)は大規模な取り組みであった。富山県総合教育センターが中心となり地域の小学校20校と協力連携し、「児童生徒の社会性に関する研究」と題したSSEを行ったものである。この実践例では、小学校高学年用社会的スキル尺度の開発、CSSTの実施、アセスメントが行われた。実践した結果、「共感・配慮」スキル得点、「意志の表明」スキル得点が実施前よりも実施後において有意に向上した。スキル得

点が上昇した児童は，学校生活適応感も上昇していたことも報告されている。ごく最近では，佐々木・細谷・小関（2006），佐藤・喜田・石川・戸ヶ崎・佐藤（2006）による学校規模で CSST を行った研究が発表されたり，金山・宝田・伊佐（2006）などが「学校規模のソーシャルスキル教育」と題した学会シンポジウムを開くなど，今後，学校規模の SSE の実践例がさらに増えていくと予想される。

SSE を学校という大きな規模で適用する際には，一度に多数の児童に特定の社会的スキルを学習させることになる。そこで，重要となってくるのは目標スキルをいかにして決定するかである。先行研究を見ると，実験者と実験学級の担任が目標スキルを決定していることが多い（たとえば，藤枝，2006；藤枝・相川，1999，2001；後藤ら，2001；渡辺・山本，2003）。学級担任が実施者であるという CSST の特徴や学校現場が多忙であるという実情を鑑みると，この決定プロセスは効率的であり，実施者の負担も少なく済む。しかしながら，学校規模や地域規模で CSST を実施する場合には，これまで学級単位で行ってきた場合の目標スキルの決定方法で必ずしもうまくいくとはいえなくなってくる。なぜならば，対象となる児童の数，参加する教師・学校の数も増えるからである。一度に多くの児童を CSST の対象としていることから，どの児童にも適度に該当する平均的なスキルを取り上げてしまい（藤枝・相川，2001），参加者一人一人が必要を感じているスキルを取り上げることがより難しくなる。また，集団が目標とするターゲットスキルが必ずしも個々の生徒の問題行動を解決するためには十分でないことも考慮し，個々の生徒の問題行動に焦点をあてた対応についても検討されるべきである（渡辺・山本，2003）という指摘もある。目標スキルを選定する上では，発達段階に応じたターゲットスキルを明確にする（小野寺・河村，2003）ことも必要である。しかし，この点を解明した調査研究は見あたらないが，まずは，教師と保護者が「子どもに獲得させたい」と考えている社会的スキルを発達段階ごとに明らかにする必要

がある。子どもは，一日の 8 時間を学校で，残りの 16 時間を家庭で過ごしていることから，教師と保護者の両方の視点を取り入れる必要がある。また，児童のニーズを反映させる必要もある。CSST の有効性を高めるには，参加者が必要だと感じる目標スキルを選定することが不可欠である（Ogilvy, 1994）からこそ，児童のニーズを明らかにすることも大切である。さらに，地域の特色，学校の風土，教師から見た学級の状態などを総合的に判断して目標スキルを決定することが理想と考えられる。

本研究では，教師らが児童の発達段階ごとに，どのような社会的スキルを児童に獲得させたいと考えているのかを明らかにすることを目的とする。調査は，中台・金山・斉藤・新見（2003）の研究を参考として進めていく。中台ら（2003）は小・中学校教師を対象として SSE に対する認識や評価を把握するための調査を行ったが，そのなかで，小・中学校教師 56 名を対象として，① SSE で取り上げたいと思うスキルについて，② SSE の必要度についての調査を実施した。中台らの調査より，小学校教師は中学校の時期を SSE が最も必要な時期と考えており，一方，中学校教師は小学校 3・4 年を SSE が最も必要な時期と考えていることが明らかになっている。小学校，中学校の教師はどちらも，保育所～高校までの発達段階のいずれの時期においても，SSE は必要であるとの見解を持っていることも明らかにされている。中台らの調査によって，教師が抱いている SSE への認識や評価が明らかにされた。しかし，教師が SSE に対して抱いている認識や評価は地域特性や学校文化によって差があることも考えられる。中台ら（2003）もこの点を考慮し，社会的スキル教育で求められるスキルは，地域性や学校の特性などによって異なってくると考えられる，と指摘している。そこで，本研究では千葉県，神奈川県，東京都の公立小中学校に勤務する教師を対象として，中台らの研究を追試する。なお，本研究が対象とする 1 都 2 県は，中台ら（2003）の研究における対象地区とは異なっていたことは私信を通じて事前に確認し

た。

2. 方法

調査の対象は、千葉県、神奈川県、東京都の公立小、中学校に勤務する教師であった。各地域の特徴を簡単に説明する。千葉県の対象地区は、太平洋沿いの工業地帯に位置する。都心からの転入者と地元住民が混在する地域であった。神奈川県は政令指定都市のある地域が対象であった。高台に位置し、一軒家が多く、落ち着いた地域であった。東京都は多摩地区の1地区と23区の1地区、計2地区が対象であった。多摩地区はマンションを主とする住宅街で住民の移動が比較的多い。経済的には比較的裕福であり、教育に力を入れている家庭も多い。23区の方は商業地区であり、昼間人口が多い。経済力や教育への熱意は上下の格差が激しい。いずれの地域においても、不登校の数が突出して多い、学校の荒れが目立つといった極端な問題はなかった。

教師らは2006年度、2007年度に開催された教員研修に参加しており、その際に回答を求められた。研修の前半は「学校における教育相談」であり、後半は「SSEの理論と実践」であった。後半の具体的な内容は、①SSEの概要に関する説明、②SSEに関する先行研究、実践事例の紹介、③「じょうずな聞き方」を例として、SSEの模擬体験、④SSEを学ぶための書籍の紹介、⑤質疑応答であった。教師は、研修終了後にアンケートへ回答した。本研究で使用したアンケートは中台ら（2003）が作成したものであり、共著者の一人である金山氏より使用許可を得たものである。全員が回答を終えるまでに要した時間は約10分であった。アンケートはその場で回収された。

2.1. SSEで取り上げたいと思うスキルについての調査

アンケート用紙には、次のように教示文が書かれていた。「あなたが小学校教師なら小学校で、中学校教師なら中学校でSSEを実施すると

します。その際、どんな社会的スキルを取り上げたいと思いますか。下にある①～⑬のうち、取り上げたいと思うものの番号に、いくつでもいいですから○をしてください。①～⑬の他にもあれば、その他の欄に具体的にお書きください。」教示文に続き、①～⑬のスキルが提示されていた。13のスキルとは、①上手にあいさつをする、②上手に自己紹介をする、③上手に相手の話を聞く、④上手に質問をする、⑤遊びなどの仲間に入れてもらう、⑥遊びなどの仲間にさそう、⑦はげまし、なぐさめなどのあたたかい言葉をかける、⑧相手の気持ちを考えて接する、⑨自分のしてほしいことなどを上手に頼む、⑩自分にとっていやなことやできないことを上手に断る、⑪自分の意見や考えをはっきりと伝える、⑫誤解や意見のくいちがいのトラブルを上手に解決する、⑬イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする、であった。その後に、「その他」として自由記述欄もあった。

2.2. SSEの必要度についての調査

教師らがSSEを発達段階のどの時期に行うことをもっとも適当と考えているのかを明らかにするために、次の教示文を用いて回答を求めた。「あなたは、下にあるそれぞれの時期において、SSEを行うことにどのくらい必要性を感じますか。」「まったく必要でない＝1」「あまり必要でない＝2」「少し必要である＝3」「かなり必要である＝4」「非常に必要である＝5」の中から、あてはまる数字にひとつだけ○をしてください。その他にも必要であると思う時期があれば、具体的にお書きください（例：大学）。」「それぞれの時期」とは、①保育所、②幼稚園、③小学校1・2年、④小学校3・4年、⑤小学校5・6年、⑥中学校、⑦高校を指していた。最後に、「その他」として自由記述欄を設けた。

2.3. SSEへの意見・感想についての調査

研修にてSSEについて学習した後、教師らがSSEに対してどのような意見や感想を持ったか

を調査するために，自由記述欄を設けた。教示文は「SSE についてのご意見や感想などございましたら，ご自由にお書きください。」であった。

3. 結 果

参加した小学校教師，中学校教師141名から回答を得た。回収率は100%であった。参加者の年齢は23歳から58歳（平均40.26，SD値10.24，中央値42），勤続年数は1年から36年（平均16.66，SD値10.88，中央値18.5）であった。校種別に見ると，小学校教師が105名（男性27名，女性78名）であり，年齢は23歳～58歳（平均39.14，SD値10.61，中央値40），勤続年数は1年から36年（平均15.74，SD値11.35，中央値15）であった。中学校教師名36名（男性21名，女性15名）であった。彼らの年齢は25歳～57歳（平均43.42，SD値8.48，中央値44.5），勤続年数は3年から32年（平均19.28，SD値9.07，中央値21.5）であった。なお，中台ら

（2003）の調査における被験者は56名で小学校教師が34名，中学校教師が22名であった。小学校教師の年齢の中央値は43.5歳であった。彼らの勤続年数の中央値は17.5年であった。中学校教師の年齢の中央値は41.5，勤続年数の中央値は19であった。中台ら（2003）の被験者と比べると，本研究における小学校教師の年齢層の方が若干若く，勤続年数も若干短かった。

3.1. SSE で取り上げたいと思うスキルについての調査結果

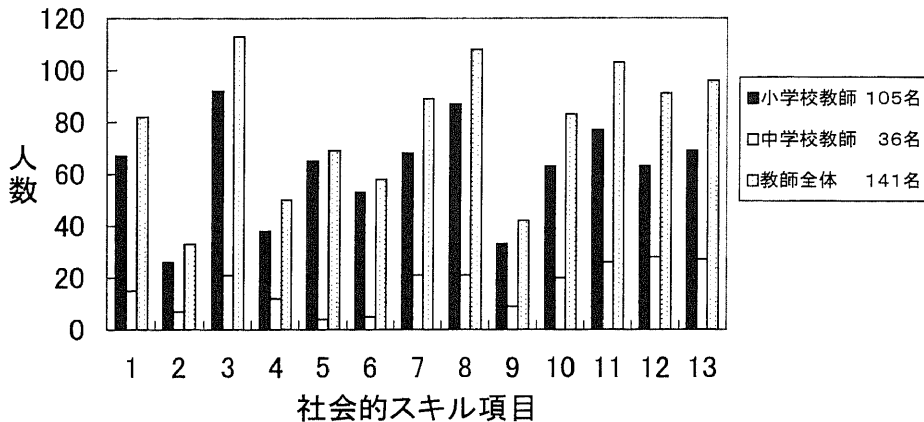
SSE で取り上げたいと思うスキルについての調査結果を Table 1 および Fig. 1 に示した。全体の回答，校種別の回答について，項目ごとに選択人数，割合（選択人数／回答者数），被選択順位を示した。

全体の結果を見ると，取り上げたいと選択されたスキルの第1位は「上手に相手の話を聞く」であった。第2位は「相手の気持ちを考えて接する」，第3位は「自分の意見や考えをはっきりと伝える」が選択された。小学校教師

Table 1 小学校教師と中学校教師が社会的スキル教育で取り上げたいスキル

社会的スキルの項目	小学校教師 105名				中学校教師 36名				教師全体 141名			
	人数	割合	順位	中台ら	人数	割合	順位	中台ら	人数	割合	順位	中台ら
① 上手にあいさつをする	67人	64%	6位	9位	15人	42%	8位	7位	82人	58%	8位	9位
② 上手に自己紹介をする	26	25	13	13	7	19	11	11	33	23	13	12
③ 上手に相手の話を聞く	92	88	<u>1</u>	4	21	58	4	4	113	80	<u>1</u>	4
④ 上手に質問をする	38	36	11	10	12	33	9	10	50	35	11	10
⑤ 遊びなどの仲間に入れてもらう	65	62	7	6	4	11	13	11	69	49	9	8
⑥ 遊びなどの仲間にさそう	53	50	10	11	5	14	12	12	58	41	10	12
⑦ はげまし，なぐさめなどのあたたかい言葉をかける	68	65	5	7	21	58	4	7	89	63	6	7
⑧ 相手の気持ちを考えて接する	87	83	<u>2</u>	1	21	58	4	2	108	77	<u>2</u>	1
⑨ 自分のしてほしいことなどを上手に頼む	33	31	12	12	9	25	10	9	42	30	12	10
⑩ 自分にとっていやなことやできないことを上手に断る	63	60	8	4	20	56	7	6	83	59	7	5
⑪ 自分の意見や考えをはっきりと伝える	77	73	<u>3</u>	1	26	72	<u>3</u>	4	103	73	<u>3</u>	3
⑫ 誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する	63	60	8	8	28	78	<u>1</u>	1	91	65	5	5
⑬ イライラしたり，ドキドキしたりした気持ちをコントロールする	69	66	4	1	27	75	<u>2</u>	2	96	68	4	1

参考として，中台ら（2003）の結果における選択順位を示した。



注) ①上手にあいさつをする, ②上手に自己紹介をする, ③上手に相手の話を聞く, ④上手に質問をする, ⑤遊びなどの仲間に入れてもらう, ⑥遊びなどの仲間にさそう, ⑦はげまし, なぐさめなどのあたたかい言葉をかける, ⑧相手の気持ちを考えて接する, ⑨自分のしてほしいことなどを上手に頼む, ⑩自分にとっていやなことやできないことを上手に断る, ⑪自分の意見や考えをはっきりと伝える, ⑫誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する, ⑬イライラしたり, ドキドキしたりした気持ちをコントロールする

Fig. 1 小学校教師と中学校教師が社会的スキル教育で取り上げたいスキル

の結果についてみると, 第1位は「上手に相手の話を聞く」であった。第2位は「相手の気持ちを考えて接する」, 第3位は「自分の意見や考えをはっきりと伝える」であった。中学校教師が第1位として選択したスキルは「誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する」であった。第2位に選択されたのは「イライラしたり, ドキドキしたりした気持ちをコントロールする」であり, 第3位は「自分の意見や考えをはっきりと伝える」であった。他方, 小学校教師, 中学校教師のどちらからも選択数が少なかったスキルは, 「上手に自己紹介をする」「上手に質問をする」「自分のしてほしいことを上手に頼む」であった。

「その他」の自由記述欄を見ると, 小学校教師からは「他者の良いところを見つけ, その良さを伝える, 広める」, 「人に注意する, 教えてあげるときの優しい言葉かけ」, 「順番をまって, する」, 「みんなの前で発表する」, 「相手との関係や時と場合に応じて言葉使いを変える」, 「他人の失敗を許せる」, 「自分がしたことなどをじょうずに話す, 自分の気持ちを素直に言える」が指摘された。中学校教師からは「年配者

への接し方」があげられた。教師らは, これらの社会的スキルをSSEで取り上げたいと考えていることが明らかになった。

3. 2. SSEの必要度についての調査結果

SSEの必要度の評定平均値をFig. 2に提示した。評定平均値は, 小学校教師, 中学校教師, そしてSSEが実施される発達段階を問わず, すべて3.5点以上の値を示していたことから, SSEの必要度は全体として高かったと考えられる。141名分の回答について, 必要度の評定値を従属変数として2要因の分散分析を行った。独立変数は勤務校種(小学校, 中学校の2水準)と発達段階(保育所, 幼稚園, 小学校1・2年, 小学校3・4年, 小学校5・6年, 中学校, 高校の7水準)であった。分析の結果, 勤務校種と発達段階の有意な交互作用は見られなかった($F(6, 966) = 0.64, n.s.$)。勤務校種の主効果も見られなかった($F(1, 966) = 4.58, n.s.$)。発達段階の主効果は有意であった($F(6, 966) = 31.03, p < .001$)。そこで, Scheffe法による多重比較($p < .001$)を行った結果, 保育所<小学校1・2年; 保育所<小学校3・

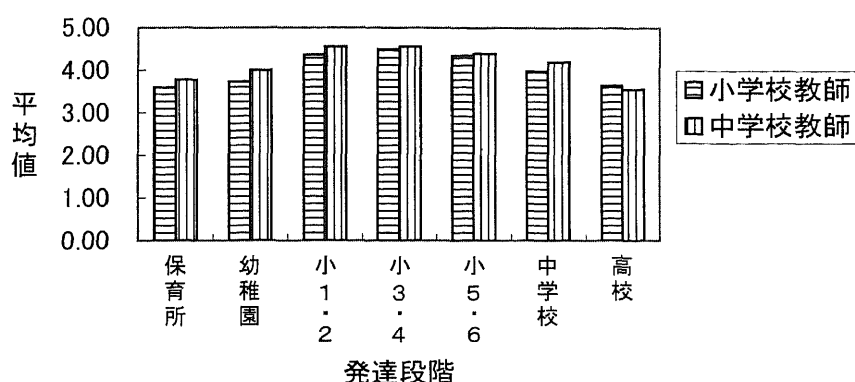


Fig. 2 社会的スキル教育の必要度の評定値

4年；保育所＜小学校5・6年；幼稚園＜小学校1・2年；幼稚園＜小学校3・4年；幼稚園＜小学校5・6年；中学校＜小学校3・4年；高校＜小学校1・2年；高校＜小学校3・4年；高校＜小学校5・6年であった。この結果，教師は保育所，幼稚園，高校よりも小学校1・2年と小学校5・6年の方が，また，保育所，幼稚園，中学校，高校よりも小学校3・4年の方がSSEを実施するのに適当な発達段階であると考えていることが明らかになった。小学校1・2年，小学校3・4年，小学校5・6年のいずれも4.3以上の得点であったことから，多くの教師が小学校をSSEを実施するのに最適と考えていることが明らかになった。

3. 3. SSE への意見・感想についての調査結果

116名(82%)の被験者が自由記述欄に意見・感想を記述していた。Table 2に32名分の意見・感想を示した。

4. 考 察

本研究は小・中学校教師を対象としてSSEに対する認識や評価を把握することを目的としており，そのために中台ら(2003)が行った調査を異なる地域において追試した。したがって，考察は本研究の結果と中台ら(2003)の結果を

参照しながら進めていく。なお，中台ら(2003)の調査地域の特徴は，山，田園，清流があるのどかな風景が広がり，学力向上を強く意識するような雰囲気ではない，ということであった。

「SSEで取り上げたいと思うスキルについての調査」の結果を見ると，小，中学校教師から選択されていたスキルは，「上手に相手の話を聞く」，「相手の気持ちを考えて接する」，「自分の意見や考えをはっきりと伝える」であった。SSEへの意見・感想の4，6，7，10，11，15，16，17はこの結果を裏付けるコメントである。6の教師のように既に実践しているという意見もあり，関心の高さが伺える。なお，この3つは中台ら(2003)の調査でも上位(1～4位)に選択されていた。学会誌に掲載されたSSEに関する先行研究における目標スキルを調べると，藤枝・相川(2001)，藤枝(2006)，後藤・佐藤・佐藤(2000)，後藤ら(2001)，小泉・若杉(2006)は「聞き方」スキルを採用し，江村・岡安(2003)，藤枝・相川(2001)，後藤ら(2001)，金山・日高・西本・渡辺・佐藤・佐藤(2000)は「相手の気持ちを考えて接する」スキルまたは同類のスキル(例えば，感情を分かち合う，相手を思いやる)を採用し，藤枝・相川(2001)，後藤ら(2000)，江村・岡安(2003)は「自分の意見や考えをはっきりと伝える」スキルまたは同類のスキル(例えば，社会的働き

Table 2 SSE への意見・感想

- 1 現在、小学校1年生の担任をしている。小学校1年生の4月から、SSEを導入する必要があると感じる。4月は基本的な生活習慣を身につけさせるのに最も大事な時期だと身をもって体験した。(小学校教師)
- 2 休み時間に友達とうまく関われない子どもが多いように感じる。塾通い等で放課後に仲間と遊ぶ機会が無い子も多い。学校でもSSEが必要であると感じる。(小学校教師)
- 3 SSEをいくつか実践したが単発で終わってしまい、定着しなかった。繰り返して行うことの大切さを感じた。(小学校教師)
- 4 最近の子どもや自分の息子を見ているとSSEはやはり必要だと感じています。自分の息子にはことあるごとに教えていますが、働いていると十分に教えることができません。他の保護者もそうなのではないかと思っています。学校でも時間があればどんどん取り入れていくべきだと思います。以前、「聞く」「話す」を授業でやったときに、なかなか身に付かず本当に難しいなあと感じました。(小学校教師)
- 5 SSEは地域や家庭での教育力の低下によって、学校でのスキルとしての指導・訓練させなければ、現在では身に付かないのでしょうか。しかし、スキルを身につけさせることによって教師として学習・生活がしやすくなると感じました。(小学校教師)
- 6 「じょうずな聞き方」スキルを実践しています。スピーチをさせた。気持ちよく話せるようになるための「じょうずな聞き方」を考えさせたところ、うなずく、拍手する、目を見るなどの意見が出された。一人一人が自信を持って生活、学習できる場を作る具体的な一歩だった。今後も学級経営の核にしていきたい。(小学校教師)
- 7 今の子ども達を見ていると対人関係がうまくできず、すぐに争ったり殺人まで発展してしまうことが多い。その前に自分の言いたいこと、したいことをはっきり言えるようであればお互いの気持ちが分かり合えるようになると思う。家族関係の希薄化も大きな問題である。保護者にも社会的スキルを広めていけるように今後していきたい。(小学校教師)
- 8 SSEは実践の場で必要なことだと思います。「あいさつをしよう」「やさしく声をかけよう」などと教師が再三語りかけてもなかなか改善していかない実態があるので、具体的なやり方がわかるスキルを児童が体験することは有効な手段であると思います。(小学校教師)
- 9 現在、小学校3年生の担任をしています。低学年からだんだん育ってきて自己中心性から抜け出しつつあります。この時期にSSEを行うことによってクラスの仲間とよりよい関係を作っていけるのではないかと思います。(小学校教師)
- 10 子どもが保育園に通っています。3、4歳児の時はトラブルが絶えなかったように感じました。あいさつ等は自然に身につけているようでしたが、幼児の頃に「上手に話をきく」「遊びの仲間に入れてもらう」等のSSE教育が必要と感じます。(中学校教師)
- 11 中学生と日々接していて、「聴く」ことができない生徒が年々増えているように感じます。他の人と距離感が上手に取れない生徒もいます。幼児期からのSSEが人格形成の上で大切だと思う。(中学校教師)
- 12 昔は集団遊びの中でスキルを自然と学んだのでしょうか、今はそうはいかないのでしょうか。自分の子どもで考えてみると、小学校中学年くらいで、友達とのトラブルを経験した頃にSSEとして学ぶといったかと思いました。(中学校教師)
- 13 生徒の中には不登校、集団になじめない子どもが居る。SSEを小学校低学年から始めていれば集団に入りやすくなるはずだと思いました。(中学校教師)
- 14 小学校であれば中学年くらいまでにSSEを取り入れていくのが有効だと感じる。特に楽しんで活動してくれると思う。成長するにつれて、活動しづらくなるのではとも思う。(小学校教師)
- 15 あいさつや聴き方などは毎日の学校生活の中で取り組んでいるが、なかなか定着しない。(小学校教師)
- 16 年々、人間関係を構築できずに、悩む生徒が多くなってきているように思います。特に、「じょうずに断る」「友達とのトラブルを解決する」「自分気持ちをコントロールする」スキルはトレーニングを受け、身に付けて欲しい。(中学校教師)
- 17 自分の意見をはっきり言える子が増えてきている反面、相手のことも考えられない子どもも多いと思う。相手を思いやっても、それをうまく表現できない子もいるのでSSEは必要だと思う。学校だけでなく家庭でも教えて欲しいと思う。(小学校教師)
- 18 家庭で身に付けるべきことが身に付かないうちに集団生活に入り、そこでトラブルが起こっている。兄弟数が少ないことから家庭で社会的スキルを身に付けることは難しいのかもしれない。(小学校教師)
- 19 社会性は低学年でこそ身に付けさせるべきだと思う。(小学校教師)
- 20 子ども達がとても自己中心的であると感じる。一方で、自分の思っていることを表現できない。こうした状況なので、社会的スキル教育を積極的に取り入れていかないと、子ども達が将来大人になってから、社会に出てうまく適応していけないのではないかと考える。(小学校教師)
- 21 モデルを示すということは、家庭でも学校でも地域でも大人が示すべきであり、そういうことを意識していくことは大切だと考えます。それを教育課程の中に無理なく取り入れることが可能であるという点では社会的スキル教育は素晴らしいと感じます。人間関係作りという点で私もグループワークトレーニングを毎年、取り入れています。色々な経験を時間の許す限り子ども達に体験させたいと考えている。(小学校教師)

Table 2 続き

-
- 22 社会的スキル教育は幼児期から小学校中学年ぐらいにかけて実施するのがよいと感じた。高学年から高校生くらいは照れや別の感情が出てきて、やりづらいのではないだろうか？（小学校教師）
- 23 家庭教育の機能が失われている今は、それを補う意味で、学校教育現場の役割は今まで以上に重いと思う。一人の人間を育てるには社会全体関わっていかねばならないと思う。（小学校教師）
- 24 学校、家庭で必要な社会的スキルを小さい内にたくさん教えていけばかなりなごやかな高学年、中学、高校さらには社会生活が送れるようになっていくと思いました。社会生活について小さい頃から考える素地ができていれば、大人になって必要なモラルを素直に考えられるようになると思います。（小学校教師）
- 25 就学以前でも社会的スキル教育は必要である。公的な所に入ってくる前の家庭での社会的スキル教育やしつけがしっかりとしていれば就学時の子どもの姿はだいぶ違ってくると思う。そこにどう切り込んでいくかが課題だと思う。（小学校教師）
- 26 今回の講義を聴いて、家庭での連携、般化について興味を持った。学校だけでやっていることを効果が現れにくいと考えるのではなくて時間がかかるものとして実践していきたいです。機会があれば、家庭にも伝えたいと思います。（小学校教師）
- 27 今の子ども達は人とつきあうことが苦手と感じている子が多いように思います。友人の言葉や行動で傷つき、悩み、解決するのにとても時間がかかります。今日の話を聞いて、小さいときから、人と接することの具体的な方法を教えておくことの大切さを実感した。（小学校教師）
- 28 今日の話の中に「家庭での協力が重要」という話があったが、経験上、社会的スキル教育が足りない子の家庭は学校教育に関心が薄く、非協力的な家庭が多い。社会的スキルが身に付いたかどうかの評価はクラス単位ではなく、子どもごとに行わないと意味が薄いと思う。社会的スキル教育は子どもに対するものではなくて、教師が身に付けなくてはならない技術だと思う。社会的スキル教育として45分×2コマを取らなくても、「その場指導」として長い間やれてきた教育であった。しかし、教師の指導力不足で必要になってきたものだという印象を持った。（小学校教師）
- 29 社会的スキル教育は幼い子どもほど大切だと思います。中・高生はある程度、社会の常識や人としての生き方を知っていると思う。各学校での生徒の実態を見て、社会的スキル教育を道徳や特活で取り上げていくと良いと思います。（小学校教師）
- 30 必修にしてカリキュラムに取り入れていく必要があると考えている。それほど、現場では危機感があります。低学年のうちから社会的スキル教育を行う必要がある。同時に、保護者へも行ってもらいたい。モラルの低下が気になります。（中学校教師）
- 31 特に幼少の頃からしっかりと社会的スキルを教えていくことが必要であり、自我が出る前からこういうものなんだと、当たり前のこととして捉えていけると、小学校中・高学年において社会的スキル教育を行ったときに子ども達にもより浸透していったと思った。（中学校教師）
- 32 社会的スキル教育は現代において必要だと思う。ただ、学校だけでは効果は上がらないと思う。心の底から保護者や地域が協力してくれればとても効果が得られると思う。（中学校教師）
-

かけ、仲間の入り方、仲間の誘い方）を取り上げている。この3つのスキルは、教師だけでなく研究者からも注目されていると言える。ところで、相手の話を聞くことはあらゆるコミュニケーションの基礎と考えられる。石川・久保（1999）は、人の話を聴くことは能動的作業である。話を聴けると、自分が何をすればいいかわかるだけでなく、相手の気持ちや考えが理解できたり、相手に関心を伝えられるなど人間関係の形成に役立つ、と指摘している。ならば、「上手に相手の話を聞く」スキルができていないゆえに、「相手の気持ちを考えて接する」、「自分の意見や考えをはっきりと伝える」スキルを遂行する段階にまで至らないのかもしれないといった因果関係も考えられる。この点を扱った研究は現時点では存在していない。参考

になるのは、金山・中台・前田（2004）の研究である。金山ら（2004）は、中学生を対象に「積極的な聴き方」スキルと学校適応について質問紙調査を行った。その結果、「積極的な聴き方」スキルは学校適応を積極的に促すというよりも、不適応状態に陥らないように身に付けておくべき基本的スキルであると、指摘している。今後、スキル同士の因果関係や学校不適応が特定の社会的スキルの不足と関連しているかなどについて扱った研究が必要になると思われる。

一方、本研究でも中台ら（2003）でも10位～13位と選択されなかったスキルは「上手に自己紹介をする」「上手に質問をする」「自分のしてほしいことなどを上手に頼む」であった。これらのスキルに共通していることは、アサーショ

ンの要素を含んでいること、これらのスキルを發揮できれば自分の利益につながる、ということである。こうしたスキルの被選択順位が下位ということは、ひとつには教師の目に、今の児童生徒はこれらのスキルをうまく使い、自分にとって必要な利益を得ているように映っているのかもしれない。もうひとつは、SSEへの意見・感想の17, 20にあるように、相手の立場を考えていない、自己中心的なスキルを表出していることが多いという好ましくない事態を反映している可能性もある。

中学校教師だけに着目すると、本研究と中台ら(2003)の結果における明確な共通点がある。①～⑦までのスキルは被選択順位が低く、⑧⑩⑪⑫⑬のスキルは被選択順位が高い、ということである。相川(1999)は①～⑦までを初級・中級の社会的スキル、⑧～⑬を中級・上級と大まかに分類しており、中学生という発達段階と合わせて考えると、中級・上級の社会的スキルが多く選択された結果は妥当であろう。

「SSEの必要度についての調査結果」の評定値を従属変数として、勤務校種×「発達段階の分散分析をしたところ発達段階の主効果のみ有意であった。小・中学校の教師らは保育所、幼稚園、高校よりも小学校1・2年、3・4年、5・6年にSSEを実施することが望ましいと考えていた。SSEへの意見・感想の1, 2, 3, 5, 13, 14, 19, 22, 24, 25, 27, 28, 29, 30も同じ主旨を述べている。この結果は、児童期は社会的スキルを学習するには最重要時期である(Cross, 1996)を支持するものである。小学校6年間の中でも注目すべき時期は、小学校3・4年生の2年間である。この2年間だけが幼稚園、保育園、中学校、高校よりも有意に高く評定されていた。つまり、小学校3・4年生はSSEを実施するのにとりわけ最適な発達段階と捉えられていることがわかる。SSEへの意見・感想の9, 12, 14を見ると、小学校3年次は、子ども達の集団はそれ自体が彼らの現実的な生活の場であるとともに、将来の社会生活に必要な技能を身につけるための場である(Cowen, E.L., *et al.*, 1973)ということ、教師らも日々

の実践を通して実感していることが伺える。なお、中台ら(2003)の結果でも、中学校教師は小学校3・4年生を頂点として、早期からSSEの必要性を感じていた。

小学校6年間に渡りSSEを長期継続することは、般化につながることも期待できる。先行研究によれば、般化は自動的に起こるものではなく(Cartledge & Milburn, 1995)、訓練終了直後には訓練効果が確認されてもその後の般化には限界がある(Ogilvy, 1994; Schloss *et al.*, 1986)と指摘され、未だ有効な解決策は開発されていない。SSEへの意見・感想の3, 4, 8, 15を見ると、毎日同じことを指導しているが定着せず、教師が難しさを感じていることが伝わってくる。この問題に対する解決策の一つとして、相川(1998)は訓練効果を持続させ、般化を促す技法が、訓練自体の中に組み込まれる必要があると述べている。相川(1998)の主張を現実化するためには、一定の時間や計画が必要である。SSEを6年間に渡って長期継続するならば、児童が社会的スキルを学んだ後で、意図的に繰り返して様々な場面のなかで般化を起こさせるような設定ができよう。

今回の結果は中台ら(2003)の結果と重なる部分もあったが異なる部分もあった。中台ら(2003)の結果では、勤務校種×発達段階の交互作用が見られ、小学校教師は保育所から中学校まで徐々に評定値が増加し、中学校において最高値に達していた。これらの差異が被験者の年齢や勤務年数の長短、または地域による学校文化の差から発生しているのか明確にすることはできなかった。どちらの研究にも、調査対象はごく限られた地域の学校に勤務する教師であったという限界がある(中台ら, 2003)。したがって、得られた結果をあまり拡大して解釈、適用することは難しい。

最後に、今後の課題に言及する。SSEへの意見・感想の5, 7, 18, 21, 23, 26, 28, 30, 32にある「子どもの社会的スキル欠如は家庭教育力の低下が一因である」「SSEは学校だけでなく地域、家庭と連携して行うことで効果が期待できる」「保護者にも社会的スキルを身に付け

させたい」といった内容について検討を加える。こうした指摘は社会的な話題となって久しい。これまでのSSEに関する研究は学校内だけで行われてきた。2006年に藤枝，小泉・若杉が初めて，学校と家庭が連携して実践したSSEの実践内容および効果測定を報告している。両研究がその効果について言及すると共に，学校と家庭の連携および地域との連携を訴えている。しかし，学校，家庭，地域が連携して実施したSSEに関する研究は今のところ無い。今後，こうした研究が行われるべきであろう。

引用文献

- 相川充 1996a 孤独感と社会的スキル 相川充・津村俊充（編）社会的スキルと子どもの対人行動 誠信書房。
- 相川充 1996b 社会的スキルという概念 相川充・津村俊充（編）社会的スキルと子どもの対人行動 誠信書房。
- 相川充 1998 孤独感を低減させる社会的スキル訓練の効果に関する実験社会心理学的研究。研究課題番号 08610112 平成8年度～平成9年度科学研究費補助金（基礎研究（c）（2））研究成果報告書。
- 相川充 1999 ソーシャルスキル教育とは何か 小林正幸・相川充（編）ソーシャルスキル教育で子どもが変わる－楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化。
- Cartledge, G. & Milburn, J.F. 1995 *Teaching social skills to children and youth; Innovative approaches. 3rd ED.* Allyn and Bacon.
- Cowen, E.L., Pederson, A., Babigian, H., Izzo, L.D. & Trost, M.A. 1973 Long-term follow-up of early detected vulnerable children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 41, 438-446.
- Cross, D. 1996 Skill Building in school health education: A solid foundation or house of cards? *Japanese Journal of School Health*, 38, 5-19.
- 江村理奈・岡安孝弘 2003 中学校における集団社会的 スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, 51, 339-350.
- 藤枝静暁 2006 小学校における学級を対象とした社会的スキル訓練および行動リハーサル増加手続きの試み カウンセリング研究, 39, 218-228.
- 藤枝静暁・相川充 1999 学級単位による社会的スキル訓練の試み 東京学芸大学紀要第1部門 教育科学, 第50集, 13-22.
- 藤枝静暁・相川充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, 49, 107-117.
- 後藤吉道・佐藤正二・佐藤容子 2000 児童に対する集団社会的スキル訓練 行動療法研究, 26, 15-24.
- 後藤吉道・佐藤正二・高山巖 2001 児童に対する集団社会的スキル訓練の効果 カウンセリング研究, 34, 127-135.
- 石川芳子 1997 小学校高学年における社会的スキルの向上を目指した援助の在り方 平成8年度東京都教員 研修生相談部学校教育相談研究室。
- 石川芳子・久保由美子 1999 上手な聴き方 小林正幸・相川充（編）ソーシャルスキル教育で子どもが変わる－楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化。
- 金山元春・日高瞳・西本史子・渡辺朋子・佐藤正二・佐藤容子 2000 幼児に対する集団社会的スキル訓練の効果－自然場面におけるコーチングの適用と訓練の般化性－ カウンセリング研究, 33, 196-204.
- 金山元春・中台佐喜子・前田健一 2004 中学生の積極的な聴き方スキルと学校適応 広島大学心理学研究, 第4号, 97-102.
- 金山元春・宝田幸嗣・伊佐貢一 2006 自主シンポジウム 学校規模のソーシャルスキル教育 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集69.
- 小林正幸 1999 なぜいまソーシャルスキルか 小林正幸・相川充（編）ソーシャルスキル教育で子どもが変わる－楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化。
- 小林正幸 2002 子どもの社会性を育てるソー

- シャル・スキル・トレーニング1ーなぜソーシャル・スキルなのかー 月刊学校教育相談, 16(5), 52-57.
- 小林正幸・相川充 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わるー楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化.
- 小泉令三・若杉大輔 2006 多動傾向にある児童の社会的スキル教育ー個別指導と学級集団指導の組み合わせを用いてー教育心理学研究, 54, 546-557.
- 國分康孝 1999 スキル教育が心を育てる 小林正幸・相川充(編) ソーシャルスキル教育で子どもが変わるー楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化.
- 松尾直博 2002 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向 教育心理学研究, 50, 487-499.
- 仲田洋子 1999 治療的な活用 小林正幸・相川充(編) ソーシャルスキル教育で子どもが変わるー楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化.
- 中台佐喜子・金山元春・斉藤由里・新見直子 2003 小、中学校教諭と中学生の対する社会的スキル教育のニーズ調査 広島大学大学院教育学研究科紀要 第3部(教育人間科学関連領域) 第52号, 267-271.
- Ogilvy, C.O. 1994 Social skills training with children and adolescents: A review of the evidence on effectiveness. *Educational Psychology*, 14, 73-83.
- 小野寺正己・河村茂雄 2003 学校における対人関係能力育成プログラム研究の動向ー学級単位の取り組みを中心にー カウンセリング研究, 36, 272-281.
- 小野寺正己・河村茂雄・武蔵由佳・藤村一夫 2004 小学生の学級適応への援助の検討ーソーシャル・スキルの視点からー カウンセリング研究, 37, 1-7.
- 佐々木和義・細谷美奈子・小関俊祐 2006 全校を対象とした社会的スキル教育ー小学校低学年を対象とした場合ー 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集223.
- 佐藤正二 1996 引っ込み思案と社会的スキル 相川充・津村俊充(編) 社会的スキルと子どもの対人行動 誠信書房.
- 佐藤正二・喜田紳一郎・石川信一・戸ヶ崎泰子・佐藤容子 2006 児童に対する学校規模の社会的スキル訓練(1)ー継続的介入(2年間)による訓練効果の検討ー 日本カウンセリング学会第37回大会発表論文集231.
- 佐藤正二・佐藤容子・相川充・高山巖 1993 攻撃的な幼児の社会的スキル訓練ーコーチング法の適用による訓練効果の維持ー 行動療法研究, 第19巻 第2号, 20-31.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練ー社会的孤立行動の修正ー 行動療法研究, 第19巻 第1号, 1-12.
- 佐藤正二・立元真 1999 児童生徒の対人関係と社会的適応・予防的介入 教育心理学年報, 第38集, 51-63.
- 佐藤容子 1993 自閉症の幼児に対する社会的スキル訓練ー直接強化法と仲間媒介法の組合せー 宮崎大学教育学部紀要 教育科学, 第75号, 27-34.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1993 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練ーコーチング法の使用と訓練の般化性ー 行動療法研究, 第19巻 第1号, 13-27.
- Schloss, P.J., Schloss, C.N., Wood, C.E., & Kiehl, W.S. 1986 A critical review of social skills research with behaviorally disordered students. *Behavioral Disorders*, 12, 1-14.
- 菅原健介 1996 対人不安と社会的スキル 相川充・津村俊充(編) 社会的スキルと子どもの対人行動 誠信書房.
- 東京都府中市立小中学校教育研究会学校教育相談部研究会 2000 小・中学校における学級を対象とした社会的スキル訓練に関する現況と今後の展望.
- 東京都立川市立小学校教育研究会教育相談部会 2001 小学校における学級を対象とした社会的スキル訓練.
- 東京都豊島区立大塚台小学校 1997 よりよい

藤枝・新井：千葉県，神奈川県，東京都の小・中学校教師を対象とした社会的スキル教育のニーズ調査

人間関係の育成—社会的スキルの視点を活かして— 平成8・9年度 東京都豊島区教育委員会教育研究校.

富山県総合教育センター 2002 平成14年度 児童の社会性に関する調査研究（第1報）—小学校低学年における社会的スキルの育成— 富山県総合教育センター 研究紀要，第21号，27-52.

富山県総合教育センター 2003 平成15年度 児童の社会性に関する調査研究（第2報）—小学校高学年における社会的スキルの育成— 富山県総合教育センター 研究紀要，第22号，79-104.

渡辺浪二 1996 うつ病と社会的スキル 相川充・津村俊充（編）社会的スキルと子どもの対人行動 誠信書房.

渡辺弥生・山本弘一 2003 中学校における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果—中学校および適応指導教室での実践— カウンセリング研究，36，1-11.

付 記

本研究に多大な協力をしてくださった千葉県，神奈川県，東京都の公立小・中学校の先生方に心よりお礼申し上げます。

本研究の一部は，日本教育心理学会第49回総会にて発表された。